イレギュラーな魔術師

常高院於初

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イレギュラーな魔術師

【Nコード】

N1356S

【作者名】

常高院於初

【あらすじ】

エリート魔術師の一家の落ちこぼれの次男坊で、家族に捨てられて親戚に引き取られ、魔術師として大成し、故郷のエリート魔術師を養成する高校の『落第した落ちこぼれが集まる』といわれる普通科に編入した、星野浩明による巻き込まれ系魔法バトル物です。自身初のオリジナル一次創作ものですので温かい目で見ていただくと嬉しいです。

プロローグ1（前書き）

自身初のオリジナルです。

今までのギャグ物ではなく、新しいジャンルの挑戦です！

プロローグ1

午前零時を過ぎた人気が全くない繁華街、その一歩はずれた地方銀行の裏口でこそこそと動く男の影があった。

サングラスをかけて帽子を深くかかって顔を隠し、全身黒づくめで大きめのシヨルダーバッグを抱えたその姿は彼が銀行の関係者ではなく強盗目的だと分かった。

「暗証番号は……っと」

男がボタンを押し終わると機械的な音がロックの解除を知らせた。調査済みとはいえ、あまりにもお粗末なセキュリティに男は半ば呆れながらなかに侵入した。

「金庫は……」

暗闇のなか、片手に持った懐中電灯を片手につきあたりの金庫室に移動し、次の解除作業に移るために金庫の扉の前にしゃがみこんだ。

「ここからが本番だ。」

気合いを入れ直して金庫に向かうと扉に耳をあて、ダイヤルに手をかけてまわし始めた。

暗闇のなか、わずかな音の違いを聞き分けていき。

「これで……よしっと」

重い金属音の音と共に開いていく扉に軽い達成感を得たその時だった。

暗闇に包まれた室内に、明かりが灯された。

「な、何だ!？」

突然の出来事に慌てて立ち上がりあたりを見回すと

「はい、チーズ」

気の抜けたような軽い声の後に、デジカメのシャッターを切る音が室内に響いた。

人間を『トラブルを起こす側』と『トラブルに巻き込まれる側』
とで分けるとしたら、この物語の主人公である星野浩明は間違いな
く『巻き込まれる側』だろう。

彼はとにかくトラブルに巻き込まれ、更に人から何かを頼まれる
と断れない水呑み馬である。

兄に頼まれて、コンビニに買い物（ビールと大福）で帰ってどうい
う組み合わせだよ）に行った帰り道、早く帰ろうと裏道に入ると、男が
銀行のセキュリティを解除して中に入るといふ場面に出くわしてし
まい、放っておく訳にもいかず、

「くそッ」

吐き捨てるように言いながら、男が奥に行ったのを確認して中に
入り、更に金庫を開けているのを確認すると、持っていたサングラ
ス（変装用に）をかけ、証拠を押さえるためのデジカメ（たまたま
持っていただけで、盗撮目的ではない）を取り出して、室内灯をつ
けた、

「はい、チーズ！」

室内灯がついたことに驚いて金庫の前から立ち上がった男に向け
て、浩明はデジカメのシャッターをきった。

「参ったねえ、おつかいの帰り道にまさか銀行強盗に出くわしちゃ
うなんて……」

事態が分からず狐に包まれたように呆気にとられている男の前に、
浩明はやきながらはデジカメを上着のポケットにしまった。

「だ、誰だ!？」

「誰って……答える必要ある?」

間抜け面をさらしていた男が、慌てて醜態を取り繕うように威圧
してくるといふ小物っぷりを見ながら、呆れて笑みをこぼして煽る
ように言い返した。

「あえて言うなら……正義の味方かな？」

「ふざけんな!」

分かりやすい奴だねえ……

虚勢を張り続ける男を更に煽るも、次に男が取った行動に浩明の楽観が吹き飛んだ。

「何だよ。魔術師かよ……」

余計な仕事が増えたな

浩明の顔から笑みが消え、ため息をついてから構えた。

近未来。科学技術の発展により、アニメやおとぎ話でしか出てこなかった『魔法』という空想の産物は、科学者の研究により現実世界にもたらされる事となった。

科学者達の長年の研究の結果、人間の体内には魔力を持つ人種が存在する事が発見され、更に訓練次第では自由に魔法が使えるようになる」と発表し、それにより魔法教育の発達を促す事となった。

しかし、こうして『魔術師』と呼ばれる人間が生まれた結果、それは世界に大きな波紋を生み出した。

『ありえない事を可能にする、それが魔術師であり魔法である』その定義によってもたらされた世界は、新たな秩序を作り、多くの混乱をもたらした。

一部の魔術師は魔法による犯罪を生み、世界に新たなる災いをもたらす事となったのである。

予想通りコンバーターを装着させたら相手の表情が一変した。

「何だよ。魔術師かよ……」

どうやら相手はコンバーターを着ける様子はない。つまり、『魔術師ではない』という事になる。

勝ったな

男が笑みを浮かべて詠唱を唱え、両腕を前に構えた。浩明が構える様子もなく、ため息をもらしていた。

「馬鹿なヤツだ。力のない人間が正義を振りかざした事を後悔させてやる」

男が詠唱を終えると、男の前には十本の氷の槍が構築された。

アイスニードル

冰雪系魔法の中でも比較的中位に位置する魔法で、一度に十本放てれば1人前の魔術師とされる

「どうだ、これだけの槍を見た事あるか？」

未だにため息をもらし、怯えたように見ていた男を挑発した。

「どうだ、これだけの槍を見た事あるか？」

十本の氷の槍を浩明に向け、男は浩明を見下すような下品な笑みを浮かべて言った。

どうしようかな……

浩明は心底めんどくさそうに、しかし、楽しみまじりに男を見た。実力はだいたい分かったが、己の手の内は晒したくはないし、何より反撃して室内を荒らすのは気がひける……。

「どうした？　びびったか、三下？」

どう対処するか思案していると、男は浩明を更に挑発してきた。

どん底に叩き落とすか

男の一言に、浩明はそう決めた。

「いやあ、室内を荒らさずにどうやって片付けようかと思ってね」

「何だと！？　き、貴様！」

相手の油断を誘うよう煽ると、男は浩明の目論見通りに逆上し、

「死ねええエエー……！！」

男の掛け声とともに、自分の作ったアイスニードルの一本を浩明

に向けて放った。

「死ねええエエー！！！」

これで終わりだ

浩明に対してアイスニードルを放った。

それは、浩明に刺さって終わり……のはずだった。

「なっ……」

男の表情が凍り付いた。相手は、自分の放ったアイスニードルを素手ではじき飛ばしたのだから。

魔術師とそうでない者との戦いは、圧倒的に魔術師に有利である。『攻撃魔法に対しての反撃の方法がない』からだ。

そして、魔術師の戦い方は己のなかにある魔力を魔法として発動するためには、己の魔力をコンバーターによって変換し、口頭による詠唱によって、はじめて魔法として使うことができる。

つまり、魔法の発動にはコンバーターと数十秒の時間が必要になる。

すなわち、コンバーターもつけていないただの一般人が、何のそぶりもなく魔術師の放った魔法に対して反撃をしたのである。

「な、何なんだお前は！ いったい何をした!？」

目の前で起こったことが信じられず、パニック寸前の男はようやく出すことのできた疑問を浩明にぶつける。

「何をって、君の見た通りの事をしたただだよ」

「ふざけるな！ 仮に貴様が魔術師だったとしてもコンバーターも詠唱もしてないのに魔法を放つなんてありえるわけが」

浩明の言葉にまくしたたて否定しようとしたが

「『ありえない事を可能にする それが魔術師であり魔法である』
じゃなかった？」

「……」

それを、遮って浩明が言った言葉に、男は黙り込んだ。

「なんなんだ、この男は!？」

自慢の魔法を、あり得ないやり方で防御され、未だ手の内を明かさないう浩明に、男の心は恐怖という感情に支配され始めていた。

「さてと……、まだやる？　アイスニードルを解除して、おとなしく引き上げるなら見逃してあげるけど」

腕を組んで自分を見下すように見ていた浩明の、降伏を勧告された瞬間、

「う……うわああああー!!」

感情を抑えきれなくなった男は、残っていた氷の槍を一斉に浩明に向けて放った。

氷の槍によってお互いの視界が遮られたのを確認してから、浩明は腕を使い、自分の前に等身大の光の壁を作り、アイスニードルを防いだ。

男の放った氷の槍をミラーバリアでなんなく防ぎきると、男の行動に感心した。

ミラーバリア

指先から己の魔力を放ち、それを大気中に形成させて光のバリアを作る、浩明が得意とする防御魔法である。

「逃げたか……」

遮られていた視界が開けると、そこにはさっきまでいた男の姿がなく、代わりに壁に大きな穴が出来ていた。

相手さんも馬鹿じゃないみたいだね

自分がかかわないとみるや即座に逃走するという、とっさの判断に浩明は感心すると、

「鬼ごっここときますか」

子供が無邪気に遊ぶように笑みを浮かべると、男の開けた穴から

外に出たのだった。

プロローグ1（後書き）

感想やご意見をお待ちしております

プロローグ2（前書き）

投稿してから、プロローグの2を投稿し忘れてたのに気がきました。
改めてよろしくお願ひします。

プロローグ 2

「くそッ、なんなんだよアイツはッ!？」

攻撃魔法を素手ではじき飛ばして応戦するなどというデタラメな光景を目にして、僅かに残っていた理性を総動員して『逃げる』という選択肢を選ばなかったらどうなっていたか……

男は恐怖で混乱し、無我夢中で路地裏を走回っていた。

「もう大丈夫か？」

やがて、男は自分に言い聞かせるように言いながら走るのをやめて、振り返って浩明が追いかけて来ていない事に安堵の声を漏らした。

「何なんだアイツは？ アイスニードルを叩き落とすなんて化け物かよ……」

「君、化け物とは失礼だね、化け物とは」

「!」

浩明の声に驚き、はっとして声の聞こえた方を振り向くが、そこには誰もいなく、顔を恐怖にひきつらせながら周りを見渡して声の主を探した。

「上だよ、上」

その声に導かれるように上を見ると、その声の主を見て更に言葉を失った。

「うつ、浮いてる!？」

男が見たもの、それは、思わず吸い込まれてしまうような満月をバツクに浮かぶ黒い服を身に纏う青年の姿だった。

「さあ、鬼ごっこも飽きた事だし、締めときますか」

その青年が自分に向かい近づくのを確認する事なく、男の意識は途切れたのだった。

戻ったぜ」

「遅いぞ！ 酒のつまみを買に行くのにどれだけかかってるんだ」
ベランダから中に入って挨拶すると、返ってきたのは叔父である
英二のお叱りの言葉だった。

「悪い、帰り道に銀行強盗の現場に鉢合わせしたんで相手してきた」
「そうか、ならいい。悪かったな」

英二の兄さんのお説教を流して弁解しながら、買い物袋を机の上
に置き、部屋に戻った。

「それで、その強盗犯は？」

「ちゃんと警察に通報しといた。今頃、地面にディープキスしてる
間抜けな姿を警官に見つけられてるはずだぜ」

着替えながら強盗犯の末路をリビングにいる英二兄さんに説明す
ると、「そうか……」と答えた。

「まあ、自業自得ってやつだよ」

着替え終えてからリビングに戻ると、椅子に腰掛けて、英二兄さ
んが淹れてくれたお茶を飲み、コンビ二袋のなかから大福を取り出
して封を切って口に運んだ。

「うん、大福はやっぱりこしあんに限るなあ」

我ながらおっさんくさいと思うが、ひと仕事の後の甘いものは浩
明にとって、ささやかな楽しみなのでやめられない。

大福を食べ終えると続けて袋の中からスナック菓子を取り出して
開けようとする、缶ビールを片手に向かい側に座り、口を開いた。

「ヒロ、引越しをするぞ」

「は？」

突然、言われた爆弾発言。それは、後に始まる波乱に満ちた学生
生活の始まりのきっかけだった。

英二から言われたこの言葉に思わず立ち上がり、上半身を前に出し
て聞き返した。

「ヒロ、落ち着け」

まくし立てかねない私を英二は、座るように促した。

「今やってる仕事の後少して片付くからな。あそこを離れてもう5年、そろそろ戻ろうと思うんだ」

「ちよつと兄さん（おじさんと呼ぶと怒るので）、何を!!」

「あいつらを見返したくないか？」

私が何を言いたいのかを見透かして返す英二の言葉に、思わず黙り込んだ。

「今のお前なら大丈夫だ。かつて無能者扱いした奴等とは比べものにならない程の魔力と実力と、それに伴った心を入れてる。自信を持って」

英二の言葉を聞きながら、浩明は昔、自分を無能扱いをした家族・いや家族だったと言ったほうがいいだろう。その連中に受けた扱いを思い出していた。

かつて浩明は、魔術師として日本の頂点天統家の次男として生まれ、その名に恥じないようと、一流の魔術師になるように努力を重ねてきた。しかし、そんな努力も、全てにおいて天才といわれた兄とそして才女とうたわれた妹とは比べものにならない程の才能の差を生み出し、私を天統家の失敗作という烙印を押し、表向きは養子という形で本家から放り出された。

「お前を引き取ってから五年、今のヒロなら今まで失敗作と言った奴等を見返してやれるはずだ。お前をはじき出した天統家に見せつけてやれ」

イタズラを企てた子供のよ様な笑みに、私は転校の話を受け入れ、故郷へと帰る事を決めた。

こうして私は、かつて住んでいた町へと帰る事へとなったのである。

プロローグ2（後書き）

感想、お待ちしております。

1 (前書き)

改めて、第一話目になります。こちらもよろしくお願ひします！

私立青海高校

元は普通科高校であったが、魔術の普及が広まり始めた時（通称、魔術創世記）に、当時の理事長が、他の教育機関に先駆けて魔術師の育成を目的とした、魔術専攻科を設立し、以来、数多くの有名魔術師を輩出した名門校となったのである。

「なんだ、あの人だかりは？」

私立青海第一高校への転校初日、校門をくぐった私の第一声はそれだった。

浩明の目に映ったのは、誰かに群がっている新入生の集団だった。

「宗一郎様」とか「雅様」と聞こえるところを見ると、頭脳明晰、スポーツ万能、容姿端麗、所謂学園のアイドルと呼ばれているであろう学生が囲まれているのが分かった。

「まっ、私には関係ないか」

その集団をあまり気にせず、人目を避けるように校舎の中に入り職員室へと向かった。

「君が星野君か。私が担任の橘だ。よろしくな」

持ってきた書類に目を通してから、担任の教師は橘と名乗った。

「星野君は……普通科への編入だけど、どうしてうちの高校に来たんだい？」

「それは……どういう意味ですか？」

質問の意図が分からず聞き返した。

「いや、気を悪くしたなら謝るよ。ただ、魔術専攻科への編入なら分かるんだけど、普通科への編入は初めてでな、君の成績なら、ここじゃなくても十分やっていけるんじゃないかと思ってな」

「ああ…それですか」

橘の質問の意図を理解して、浩明は声を挙げた。

浩明が編入した私立青海学園は魔術師の育成に力を入れる魔術専攻科が有名で、卒業生のなかには数多くの有名な魔術師がおり、入学希望者が後を絶たない全国でもトップクラスの名門校であり、一方の普通科はというと、受験で失敗した学生が二次試験を受けて入ってくるという所謂『落ちこぼれの集団』というレッテルを貼られているのである。つまり、浩明のように自ら望んで編入するような人間は珍しく、と言うかまずいと言っても過言ではないのである。（実際に浩明が編入試験を受ける書類を提出した時に、魔術専攻科への編入ではないのかと何度も聞かれた）

「英二兄さん、いや、兄にこの高校をすすめられたんです。ここなら私のやりたい事が出きる筈だつて」

「やりたい事ねえ…」

浩明の回答に、橘は理解しかねるような表情で呟いてから

「まあ、何がしたいか知らないけど魔術専攻科の生徒と問題だけは起こすなよ」

「はい、向こうから何かしてこない限り起こしませんよ」

橘の注意に対して、起こすか起こさないかは相手次第だと釘を刺して答えた。

「お前、喰えない奴だな。とにかく、俺から言いたいのはそれだけだ。じゃ教室へ行くから付いて来い」

そう言われ、橘の後ろについて職員室をでた。

「橘先生」

「なんだ？」

「随分と目立ってますね」

「我慢しろ。本校初の普通科編入生を見たい珍しいもの見たさだ」
移動中、周囲から注がれる好奇心に満ちた視線を先にいる生徒達
を見ながら聞くと、橘は諦める事を促した。

「橘先生、注意しないんですか？」

「生徒の好奇心を止めれるほど、俺は有能じゃないぞ。それに……」
そう言っつて浩明の方を振り向くと

「君、全く気にしてないだろ？」

「ごもつともで」

橘の言葉に、肩をすくめてから答えた。

「ども、星野浩明です。……よろしくお願ひします」

橘先生に紹介され、愛想笑いをしながら形式的な挨拶をすませる
と、途端に好奇の視線が向けられた。

まあ、当然といえば当然か……

ある程度、予想していたとはいえ、浩明はそんな視線をまるで気
にする様子もなく無視した。

皮肉にも天統家での十一年間、軽蔑され、見下され続けた浩明に
とつて好奇の視線など全く気にならないのだ。

「えつと……、星野の席だが、窓側の……」

「空いてる席つすね」

しかし、それに気付かない橘先生は、浩明を気にかけて、声をか
けたが、そんな気遣いを無視するように橘先生の言葉を続けてから
空いていた席についた。

「イライラした時に甘いお菓子」という考えは万国共通なのかは
知らないが、浩明は「イライラした時には甘いお菓子」と決めてい

る。……もちろん、イライラしていなくても甘いものは浩明にとって大好物なのは変わりないんだが。

学校帰りの買い食いに、そんな言い訳じみた理由を出して、浩明は自分を納得させることにした。

浩明がイライラを発散したくなる理由は、転校初日のクラスメイトや魔術専攻科から来た見物客にあった。

「穴が空くほど見続ける」って言葉が本当に起こったら、今の俺はスポンジ状に穴だらけになっていくはずだ。つまり、何が言いたいかというと「鬱陶しい」の一言に尽きるというわけだ。

授業中はチラ見程度、休み時間は動物園のパンダ扱い。転校生に対する質問タイムというお約束を期待したわけではないが、見せ物になるという展開は予想がつかなかったよ。結局、初日はクラスメイトとあまり会話も出来ずに終わってしまったわけだが、まあ気にしてたら負けだな。明日からは、こちらから近付いてみよう。

「次の方、ご注文をどうぞ」

決意を新たにしていると、自分の順番が来たらしく、軽快な店員の声に、考え事をやめて、メニューに目を移した。

「え……つと、クリームに粒あんと……」

家で引越しの片付けをしている英二兄さん用に手みやげの分も注文して、大判焼きの入った袋を受け取ると、店から離れた。

焼きたてというのはなんとも得難い誘惑があるものだ

紙袋のなかから未だに湯気の立つ熱々の今川焼きをひとつ取り出し、口に持つてこうとして、それが口に入る事はなかった。

轟音と共に襲いかかってきた熱風が、浩明の右手で持っていた今川焼きと、左手で抱えていた今川焼きの入っていた紙袋を近くに出来ていた水たまりに吹き飛ばした。

1 (後書き)

感想、お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1356s/>

イレギュラーな魔術師

2011年12月28日02時53分発行